

中興の祖 酒井忠徳と庄内藩校致道館

③

庄内初代部(1772年)の翌年、忠徳は領内を巡視して江戸へ戻ります。財政再建を誓っていたことでしょう。しかし、大火で類焼した江戸藩邸の修繕、田安徳川家の脩姫との婚姻、従四位下への叙任など、出費を抑えることは難しいもの

でした。忠徳自らも儉約に励みますが、幕府の普請などもあり、状況は悪化するばかりでした。

そこで酒田の豪商本間家3代光丘に白羽の矢が立ち

明の大飢饉に直面し、戸時代で最大といわれる「天

明の豪商や豪農から取

忠徳の改革は究極の選択

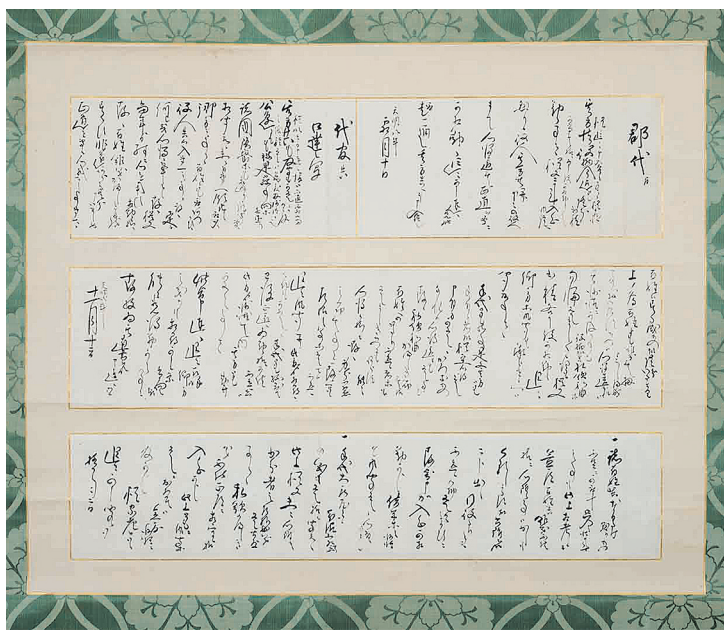
ます。砂防林の造成や米の献納などで藩の財政に寄与し、武士の身分を許されていた光丘は、江戸に召され、庄内藩御勝手御用掛に起用されました。財政改革の「安永御地盤組立」「天明御地盤組立」を提出し、私財も投げうって財政改革に取り組みました。改革は一時成功し、光丘は郡代次席にまで取り立てられま

た。さらに同年、忠徳は幕府より東海道川普請手伝い(東海道諸川の疎水工事)を命じられ、その費用は2万3000両に膨れ上がり、上米・献金・借財で賄うこととなりました。

大胆な改革を建白した白井矢太夫を登用すると英断します。矢太夫は、抜本的な農政改革に取り組みます。徳政(借金帳消し)による困窮者の救済、農民の諸税負担の軽減、農業振興策(菜種かす等の肥料の確保)、殖産興業(漆木の植え付けの奨励等)、凶作への備え(備荒粉)などを実施しました。この農政改革により

善の直書を出し、建白書を募ります【写真1】。これは郡代・代官・大庄屋に宛てたもので、農政施策の留意点、なかでも農民を慈しむよう述べています。農民たちが抱える借金は莫大で、抜本的な改善が必要だと考へてのことでしょう。

その結果、忠徳は「神田大黒」の異名で呼ばれるほど達書



本間光丘と白井矢太夫、どちらも改革の立役者ですが、両雄並び立つことは難しいものでした。光丘は財政改革の一方で、結果として農地を集積することとなり、大地主に成長しました。矢太夫はそれを抑止する農政改革、特に豪商や豪農が痛手を被る徳政令を提唱したわけで、利害は対極にあったといえます。

この後、忠徳は矢太夫に全幅の信頼を置いて政治を行います。光丘は失脚したわけではありません。国の大事に備えるための「忠徳のへそくり」1万両を託されていたのです。

皆さん知ってのとおり、本間家は庄内藩の危機を幾度も救つことになりました。忠徳の判断は、究極の良策だったようです。
(致道博物館主任学芸員・佐藤淳)